

## エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その15 「四季」の曲—日本編)

## 昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

ある人から季節ごとにどのような昆虫の曲があるのかとの難しい注文を受けた。「四季」「十二月」をキーワードにして聴くことにする。「四季」と言うとヴィヴァルディの《四季》や芹洋子の《四季の歌》を思い浮かべるが、「四季」を冠した曲は多い。今回はそのうちの日本編である。

八橋検校 (1614～85) の箏組歌《四季の曲》は《扇の曲》《雲井の曲》とあわせて八橋の三曲と言われる。「源氏物語」の初音の巻の描写を経て、春夏秋冬と続く。春は鶯、秋は鹿、松虫と雁が鳴き声を寄せる。

江戸時代からの《四季の遊》《四季の曲》等の箏曲では鳴く虫がよく歌われる。京都の舞妓が踊る《京の四季》は文久年間 (1861～1864) ころに流行した曲で、春は夜桜、夏は夕涼み、秋は紅葉、冬は雪見酒等祇園を中心に東山、圓山の風物を風雅に歌う。伝統音楽を人々に愛唱して貰うため昭和初めに作られた大和楽《四季の花》では、秋の尾花と菊のなかの待虫 (松虫)、鈴虫だ。

瀧廉太郎 (1879～1903) の《四季》は4曲からなる組歌で、第一曲が有名な「春のうららの」の〈花〉。夏の〈納涼〉秋の〈月〉冬の〈雪〉と続く。〈月〉は後に山田耕筰がピアノ伴奏版〈秋の月〉に編曲した。〈月〉だけが作詞も瀧廉太郎で、「などか人に物思はするあゝ啼く虫も おなじ心か」と歌われている。瀧には《四季の瀧》という佳曲もあるがそこでは山桜と紅葉の植物だけだ。

《田舎の四季》は農家の原風景を歌った文部省唱歌で、春の「眠る蝶々と飛び立つひばり」、夏の「桑摘むおとめと太る春蚕」、冬の「餅を引くねずみ」が微笑ましい。

文部省唱歌《四季の雨》は季節ごとの雨の姿を表した佳曲だが歌詞には植物しかない。それをもとにした池田彌三郎作詞、山田抄太郎作曲の《雨の四季》は江戸の下町風景の曲である。

高田三郎 (1913～2000) の合唱曲《心の四季》の第2曲が〈みずすまし〉で、ミズスマシと比べて人間の生き方を歌う。俳句でミズスマシはアメンボを指すことが多いが、この曲の「一滴の水銀のようである」「時々水にもぐる」という歌詞からは甲虫目のミズスマシだろう。

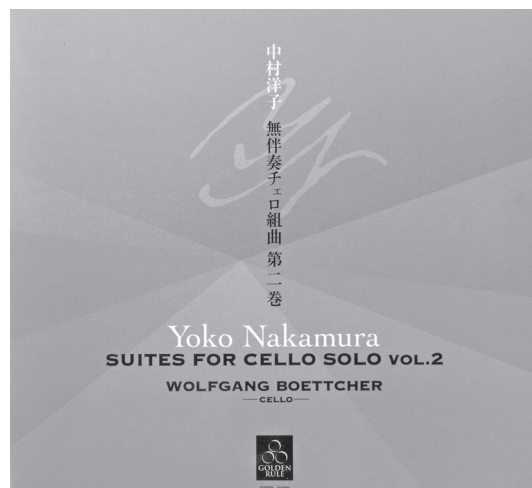
中田喜直 (1923～2000) の歌曲《四季の歌》は作詞

畑中良輔で春には小鳥、秋には鴉が歌われる。三木稔 (1930～2011) の和楽器による《四季 ダンス・コンセルタント I》や武満徹 (1930～96) の打楽器曲《四季》には生き物の姿がなさそうだ。

中村洋子の《無伴奏チェロ組曲》は春、冬、秋、春分、夏、喜びを表す六つの楽曲からなる密度の濃い曲である。人類の至宝バッハの《無伴奏チェロ組曲》に半歩でも近づきたいとの思いで作曲され、季節ごとに六つの楽章からなる。それぞれ季語、俳句等が付され、夏に相当する第5番の2楽章〈灯蛾〉は、ほのかな光に集まる蛾の姿である。

J-POPで昆虫が関係する「四季」の曲名と歌手名を記す。《四季》(大貫妙子)は蝉時雨、《学生街の四季》(岩崎宏美)と《ふるさとの四季をうたう》(千昌夫)に赤とんぼ、《四季津軽》(吉幾三)にはとんぼである。

このように江戸時代から現在に至る「四季」の曲たちを聴くと、昆虫は必ずしも顔を出さず、その中では鳴く虫、蝉、蜻蛉が多いという当たり前の結果になった。しかし虫をキーワードにして聴くと、音楽の姿も変わってくるようだ。



中村洋子 無伴奏チェロ組曲第二巻  
GOLDEN RULE GDRL-1002

## NEWS

## 農薬危害防止の講演会を開催

## 農薬工業会

農薬工業会・安全対策委員会は6月16日、都内文京区の全水道会館で、農薬危害防止に関する講演会「最近の農薬中毒事例と作業者暴露低減に向けての取組み」を開催した。農林水産省が厚労省、環境省および都道府県と連携して毎年6月から8月末に行っている農薬危害防止運動に賛同して開催している講演会で、同工業会会員および関係団体から多数が出席した。

同工業会の阪本 剛専務理事の冒頭あいさつの後、農林水産省消費・安全局農産安全管理課農薬対策室の平林太輔安全指導係長が、「農薬の危害防止について」と題して講演。続いて(公財)日本中毒情報センター・つくば中毒110番・医薬品安全性情報提供担当の高野博徳課長が「農薬中毒とその対応」、佐久総合病院健康管理部の永美大志氏が、「日本農村医学会・農薬中毒部会の中毒(障害)防止のための調査研究と啓発活動」をテーマに具体的事例を紹介しながら応急手当や治療方法など適切な対応について詳述した。



農薬の危害防止に向け熱心に聴講

## 平成28年度第1回講演会を開催

## 東京農業大学総合研究所研究会・生物的防除部会

東京農業大学総合研究所研究会・生物的防除部会(和田哲夫部会長)は6月16日、都内世田谷区の東京農業大学・農大アカデミアセンターで、平成28年度第1回講演会を開催した。今回のテーマは、薬剤抵抗性の発現とIPMを含めた抵抗性管理のあり方や今後の展望に設定。研究機関や農業企業などから約60名が出席した。

静岡県農林技術研究所茶業研究センターの内山 徹上席研究員が、「チャノココクモンハマキにおけるジアミド剤抵抗性の実態と今後の抵抗性管理」、長野県野菜花



薬剤抵抗性管理を巡り会場からの質疑も相次いだ

き試験場環境部の北林 聡研究員が、「コナガにおけるジアミド系等殺虫剤感受性の実態と今後の抵抗性管理」と題して講演した。

## 園芸用殺虫剤「ロビンフット」の販売を開始

## エアゾールタイプ、住友化学

住友化学は、2016年3月2日付けで農業登録した園芸用殺虫剤「ロビンフット」の販売を6月23日から開始した。

ロビンフットは、同社が開発した合成ピレスロイド系のフェンプロパトリンを有効成分とするエアゾールタイプの殺虫剤で、りんご、なしの重要害虫であるヒメボクトウやカミキリムシ類等の穿孔性害虫を適用対象としている。穿孔性害虫の幼虫は樹の中に潜んでいるため散布による薬剤処理では防除が難しかった。

同剤は、エアゾールタイプのため穿孔性害虫の食入孔へノズルを差し込んで噴射処理でき、樹の中に潜んでいる幼虫に優れた殺虫効果を発揮する。また穿孔性害虫以外にも、ノズルを使わずに噴射処理することで、樹木類に発生するケムシ類を防除することもできる。

ノズル式と噴射式の2ウェイノズルを採用し、処理場面によって簡易にノズルを切り替えることができる。果樹の栽培管理作業の合間にも処理できるよう携帯性に優れた設計とした。



## 第27回通常総会を開催

## 緑の安全推進協会

公益社団法人緑の安全推進協会(齊藤 登会長)は6

月17日、都内千代田区のTKP 神田駅前ビジネスセンターで第27回通常総会を開催した。

総会では、平成27年度の事業及び収支決算を承認。役員人事では、坂井哲四郎氏および宮田敏宥氏の2理事が退任したのにもない、廣瀬 薫ニチノ緑化代表取締役社長、細川寛治理研グリーン代表取締役社長が新たな理事に選任された。

また平成28年度事業では、農薬の適正使用に関する研修・「緑の安全管理士」資格認定事業、知識の普及・啓発事業（講師派遣、電話相談、リーフレット配布等）、「グリーン農薬総覧2017」の発行などの計画が報告された。



緑安協の第27回通常総会

## 中央研究所の一般見学会を開催

### シンジェンタジャパン

シンジェンタジャパン（本社・東京都中央区晴海、篠原聡明社長）は6月25日、同社の中央研究所（茨城県牛久市久野町）で一般見学会を開催した。同研究所では、日本の農業に適した農薬の製剤研究や残留分析、野菜・花きの新品種の商品化などに取り組んでおり、見学会は地域住民を対象にその業務内容を広く知ってもらう狙い。親子連れやカップルなど約250人で賑わった。



どうやって青虫を退治するの？ 興味津々の子どもたち

見学コースは、A「わかるしくみクロマトグラフィー、

B「世界のトマトを見てみよう」、C「キャベツにつく虫って？～野菜害虫の上手なおさえかた～」、D「レタスやズッキーニで食卓を鮮やかに飾りましょう！」、E「遣伝子（いでんし）ってなんだろう？」の5会場で自由に見学することができる。無防除で虫食いだらけのキャベツに歓声をあげる子どもたちや野菜の害虫や病気をどう防除しているのかなどについて説明員の話しに聞き入る主婦の姿が印象に残った。



篠原社長（左）と森島研究開発本部長

また同日午後からは報道を対象にした説明会を開催。森島靖雄研究開発本部長が、「当社は研究開発の基本を大規模農家から小規模農家まで、生産者に寄り添った農薬や種子の開発に置いている」と述べるとともに、パイプライン上の殺虫、殺菌、除草各分野の新規剤、さらに種子処理分野の革新的な新規剤などについて今後の開発・製品化計画を紹介した。

続いて篠原社長が、「植物のちからを暮らしのなかに」というコンセプトに基づいたシンジェンタの事業戦略や食料生産性向上への貢献を強調。2020年までに目に見える貢献を行うことを目指してグローバルに取り組んでいる六つのコミットメントについてふれた。

コミットメントは、①作物の効率性を高める、②劣化した農地を回復する、③生物多様性を促進する、④小規模農家を支援する、⑤農業従事者の安全を守る、⑥全ての労働者に配慮する—の六つ。このうち生物多様性の促進については、山梨県甲府市で「耕作放棄地の花畑化」プロジェクトに取り組んでいる。これは玉川大学ミツバチ研究センター、雪印種苗、養蜂家、甲府市農業委員会とのパートナーシップによるプロジェクトで、クローバーを緑肥植物として耕作放棄地を回復し、花畑化することにより、ハチなどの訪花昆虫の生息地と蜜源を確保する試みを実施している。業界を超えたパートナーシップをグローバルに構築してコミットメントの達成を目指していく。

## 2016年度茨城県病害虫研究会研究発表会を開催

7月1日水戸市で、茨城県病害虫研究会

茨城県病害虫研究会(会長:渡邊 健・茨城県農業総合センター農業研究所所長)は7月1日、茨城県水戸市のホテルレイクビュー水戸で、2016年度茨城県病害虫研究会研究発表会を開催した。県内の試験研究・普及機関に加え、大学、農薬企業、国法の試験研究機関などから約100名が参集。同研究会は1960年の発足以来、今年で56年目を迎える。県の試験研究機関が事務局として運営し、発行を継続してきた会誌「茨城県病害虫研究会会報」が第55号を数えるなど、全国的にも希有な活動を展開している。

総会の冒頭、渡邊会長は、「作物の多様化や気候温暖化などの影響により、病害虫の発生リスクは拡大している。また、大筋合意したTPPへの対応、農産物の輸出促進に対応した病害虫防除の確立など、日本農業、そして茨城の農業も大きな転換期を迎えている。引き続き、生産現場に密着した研究成果を広く県内に情報発信する役割を果たしていきたい」とあいさつした。

農研機構中央農業研究センター虫・鳥獣害研究領域の長坂幸吉生物的防除グループ長による特別講演「バンカー法を用いた施設野菜の害虫防除」のほか、県内で発生し問題化している病害、虫害、獣害などの研究成果として一般講演7題、事例紹介5題が発表され、活発な意見交換が行われた。

講演終了後、茨城県農業総合センター小河原孝司専門技術指導員の司会で、県内で発生が問題となっている麦類の種子伝染性病害を主とした病害虫について情報交換が行われ、各農薬企業からは新農薬、重点農薬などに関する情報が提供された。



病害虫の発生動向や防除対策をめぐる活発な質疑応答

### 【催し物】

#### 第31回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン—2016』

—変わる農業が抱える諸課題に挑む—

主催：公益財団法人 報農会

協賛：日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会、日本雑草学会

日時：平成28年9月14日(水) 10:15～17:00

場所：「北とびあ」つつじホール

(東京都北区王子1-11-1)

参加費：一般2,000円 学生1,000円

プログラム

10:30～11:20 耕作放棄地と農地集積が植物保護に及ぼす影響

農研機構農業環境変動研究センター 山中武彦氏

11:20～12:10 近年多発する獣害について—シカ・アライグマ・イノシシ—

森林総合研究所野生動物研究領域 岡 輝樹氏

13:20～14:10 航空防除の変遷、現状と課題

一般社団法人 農林水産航空協会 森田征士氏

14:10～15:00 超音波を利用した物理的害虫防除技術

徳島県立農林水産総合技術支援センター 小池 明氏

15:10～16:00 栃木県における農産物輸出に関する取組について

栃木県農政部 高崎 正氏

16:05～16:45 総合討論

シンポジウム終了後には、植物防疫の発展に寄与された功績者の表彰式及び祝賀会を開催する。

申込み：9月7日までに、下記連絡先にEメールまたはFAXで所属・連絡先を明記の上、申込み。

連絡先：公益財団法人 報農会 事務局

〒187-0003

東京都小平市花小金井南町1-12-11 BLOSSOM みさと

TEL/FAX 042-452-7773

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp

### 【事務所移転】

石原バイオサイエンス株式会社は、東京オフィスを移転し、7月19日から新住所で業務を開始した。

(新住所) 〒102-0071

東京都千代田区富士見二丁目10番2号

飯田橋グラン・ブルーム6階

電話：総務管理部 03-6256-9130

営業統轄部 03-6256-9150

業務グループ物流センター 03-6256-9160

開発普及部 03-6256-9170

登録部 03-6256-9180

東京支店 03-6256-9190